

Louisa May Alcott の *Little Men* における

インディアン教育

—— 児童向けインディアン物語を執筆した動機を巡って ——*

本岡 亜沙子

序

Louisa May Alcott (1832-88) の *Little Men: Life at Plumfield with Jo's Boys* (1871) は、Jo (Josephine) Bhaer (旧姓 March) が学園 Bhaer Garten の母として、題名どおり生徒達を「小さな紳士達」に育成する学園物語である。

この学園ものを分析する前に、*Little Women, or, Meg, Jo, Beth, and Amy* (1868-69) 第2部最終章を執筆した1869年、*Little Men* 出版よりさかのぼること2年前の時点ですでに、Alcott の頭の中に Bhaer Garten の原型が完成していた可能性を検討する必要がある。というのも、そこでは Jo が Bhaer Garten の設立を宣言し、学園内のシステムや在園生の様子を読者に予告しているからである。また、各生徒の性格のみでなく、のちに登場する生徒のフルネームまで明かされている事実からして、*Little Women* 第2部最終章を *Little Men* の〈予告編〉と同定して間違いない。

ただし、本編 *Little Men* には一人だけ予告編と異なる生徒が登場する。それが、インディアンらしき少年 Dan (Daniel) Kean である。¹ そもそも予告編では、歌声が世界一美しい、黒人の血を4分の1引くクアドルーンの入園が示唆されている。しかし、彼／彼女とおぼしき人物の登場は、*Little Men* の続編、*Jo's Boys and How They Turned Out* (1886) まで待たなければならない。

多くの批評家も認めるとおり、Alcott が、教育哲学者の父 Amos Bronson Alcott (1799-1888) の設立した Temple School を素地に、Bhaer Garten を構想したことはまず間違いない。² とすれば、1839年というご時勢に、Bronson が奴

* 本稿は、2009年3月5日に授与された博士号の広島大学学位請求論文「19世紀後期アメリカ児童文学における孤児」の一部を、中・四国アメリカ文学会平成21年度秋季研究会（2009年9月13日、広島修道大学）において口頭発表したものに加筆修正を施したものである。

¹ 本稿では、タイトルを始め、「インディアン」や「黒人」という、今日では使用をためられる言葉を用いているが、これは、19世紀後期という時代を考慮し、また、Alcott 自身が日常的に用いた言葉である点を重視した結果である。

² Bhaer Garten と Temple School の関連性は、Stallcup 92；Saxton 310-11；Elbert 234 を参照。

隷廃止論者の精神に忠実に則り、黒人少女を入学させた恰好の美談を袖にしてまで、彼女が、予告を裏切ってインディアン風の少年を Bhaer Garten に入園させた理由はますます謎めいてくる。

この謎は、今まで批評の俎上に載ることがほぼなかったものである。例えば、批評家 Janice M. Alberghene は、予告編のクアドルーンが本編に登場しない変化に反応を示すものの、その謎解きを始めない (9)。また、Bronson と Jo の学校の類似性や Dan のインディアン性の問題にも触れた稀有な批評家 Caroline F. Levander でも、予告編と本編の相違点を疑問視してはいない (42-43)。インディアンの生徒に対する注目度の低さの根底には、元来、Alcott 作品内のインディアン表象が批評家に注目されてこなかった経緯がある。Alcott 研究史において、フェミニズム批評や黒人研究は熱を帯びているが、インディアン表象研究は下火のままなのである。³

そこで本稿では、インディアン少年の予告なき登場をめぐる Alcott の動機や戦略を探究することで、作者のインディアン観に迫りたい。

I. “Kindness Is Always Better Than Force”

—Bhaer Garten 内の教育方針—

先に触れたとおり、予告編の Bhaer Garten と Temple School には共に黒人生徒の姿がある。その他にも、両校には共通する教育信条 “Kindness is always better than force” (L. Alcott, *Little Men* 313) が掲げられているように見受けられる。そこで本節では、Alcott が Temple School の創始者 Bronson の教育思想を Bhaer Garten にどのように取り入れたのか、という問題に焦点を当てることにする。

そのためにはまず、Temple School が Bhaer Garten のモデルであることを明らかにしておく必要があるだろう。1873年、Alcott はある手紙に、“The original ‘Plumfield’ [the location of Bhaer Garten] was quenched forty years ago in Boston, & has never sprung up again except on paper” (Myerson 175) と、40年前に閉校した学校の理念に基づき Jo の学園を構想したと告白している。時代背景から考えても、そのモデル校は Bronson の学校と特定できる。彼女が父の学校を小説の上で再現した動機は、Temple School の教育記録 *Record of Mr. Alcott's School* 第3版 (1873) の序文に転載された別の手紙に記されている。⁴ その手紙は、*Little Men* が出版された1871年、父 Bronson が約35年ぶりに再版を

³ Alcott の人種関連のアンソロジーでも、編集者 Sarah Elbert はインディアン作品を含めていない。

⁴ *Record of Mr. Alcott's School* 初版は1835年、第2版は1836年に出版されている。

決意した同書に箔をつけるため、Alcott が、同校の助手を経て著名教育者になった Elizabeth Parmer Peabody (1804-94) に序文の執筆を依頼したものである。その依頼文には、“the very imperfect hints in . . . the childish fiction of the daughter” (3) を介して、30年以上目の目を見なかった “the wise and beautiful truth of the father” (3) がようやく世間に認められたと喜ぶ娘の姿がある。父の成功を陰で支えた自負心の垣間見えるこの手紙の内容を考慮すれば、Alcott は父の教育思想の再評価を視野に入れて *Little Men* を執筆したと言えよう。

Bronson の教育思想の中でも、子ども原罪説を否定し、子どもの内的可能性を尊重する考えを、Alcott はとりわけ小説の上で再現した。例えば、詰め込み教育や身体的体罰など、あらゆる外的手段による矯正を廃止した父の教育理念に則り、Bhaer Garten には、“we don't believe in making children miserable by too many rules, and too much study” (*Little Men* 15) という教育方針が貫かれている。⁵ その結果、乱闘騒ぎに発展しない限り、競争やゲームを容認する教師達は、階段の手すりを滑り降り、まくら投げを満喫する自由を生徒に与える。また Jo は、お転婆娘 Nan Harding が雄たけびをあげて床の上をはいずり回る犬真似ごっこをもいさめない。子どもの這う行為に対する彼女の寛容さは注目に値する。それは、ピューリタン時代以降、アメリカ社会は這う行為を人間の自然な発達段階における行動でなく、野生動物のそれとして括り、ひどく嫌悪してきたからである。19世紀の子ども用家具を研究した歴史家 Karin Calvert によれば、大人は、子どもをベッドに寝かせ、全身を産衣で幾重にも巻き付けて固定することで、這う姿勢の矯正を行った (33-34)。這う行為に対するこのような伝統的な拒否反応を参照するなら、犬真似という非人間的な行動を阻止しない Jo の指導方針は極めて寛容であることが分かる。

Little Men 内の野生的なごっこ遊びは枚挙に暇がないが、ここで問題にすべきは、それらの遊びに概してインディアン表象が付随する点である。その好例として、先述した Nan が、大量虐殺を仕掛けるインディアン首長ごっこを演出する場面を紹介しよう。

Nan . . . got him [the painter] to paint it [Daisy's big doll] brick red, with staring black eyes, then she dressed it up with feathers, and scarlet flannel, and one of Ned's leaden hatchets; and in the character of an Indian chief, the late Poppydilla tomahawked all the other dolls, and caused the nursery to run red with imaginary gore. (108)

⁵ 矯正教育を廃止する Bronson の教育理念については、宇佐美89を参照。

Nan は、意図的に友人から借りた大きな人形で、他の小さな人形をことごとく惨殺する。同時代の歴史家 Francis Parkman (1823-93) が、 “[T]he Indian were drunk already with homicidal rage, and the glitter of their vicious eyes told of the devil within” (195) とインディアンの気質を説明したように、Nan もまた、人形を巨人役／小人役に二分することで、巨人役インディアン首長に悪魔的で「野蛮」で残忍な性格を付与する。人形遊びが殺りく事件へ急変する本場面と同様、生徒の問題行動がインディアン表象を介して表出する傾向は、次の “*sackerryfice* [sic]” (110) ごっこにも顕著である。

この遊びは、生徒数名があらかじめ用意した祭壇にインディアン首長らしき “the splendid red and yellow captain” (112) 率いる兵士や船などを祭りあげる儀式から始まる。そして、その祭壇をおもちゃの家や木で囲んだ彼らは、文字通り “the doomed village” (112) を演出し、住民ともども村全体を焼き尽くす。燃えさかる炎に理性を狂わされた子ども達は、猛る心を抑えられない様子で “dancing like wild Indians” (113) を繰り返す。かくして生徒達に潜む「野蛮性」は、暴力的破壊力を伴うインディアン表象を通して姿を現す。

では Jo 達にとって、「野蛮な」行動を取る生徒は、当時のインディアンと同様の殺人鬼のような存在であったのか。ここで振り返るべきは、子どもを、動物的衝動を生まれながらに持つ存在と捉える Bronson の教育観である。1830年、つまり Temple School 設立の4年前、彼が自費出版した小冊子 *Observations on the Principles and Methods of Infant Instruction* から、その教育思想を確認する。

When the force of animal impulse has expended itself by free and natural recreation, and left the physical system in a state of tranquillity, the mind imbibes the influence, and forgetting the scenes and activities of its previous joys, yields itself to the loftier claims of its nature, and asks the sympathy and guidance of instruction. . . . (5)

Bronson にとって子どもは、動物的衝動を抱えた未完成な人間を意味した。言う子どもの例からも明らかのように、子ども原罪説の流れを汲むこの考えは、同時代の教育者のそれと軌を一にしている。ただし、身体的体罰や知識の詰め込みなどで矯正する同時代の一般的な教育方法と異なり、彼は、無制限の運動や遊びなどをおして、その衝動を解放させることを目指した。Bronson は、動物的衝動を解放して初めて、子どもの内に秘めた愛情、良心、知性など、より高次の人間性が芽生え、彼の施す知的教育を吸収する素地が形成されると考えていたのである。

動物的存在から人間的存在へ向かう発達過程に沿って、例のいけにえごっこをする生徒達も、インディアンのように踊りながら動物的衝動を解放した後、心身ともに静寂な状態を経て、人間の要求の芽生えを経験する。事実、儀式の途中、火の中でもがき苦しむ人形の惨状を目撃した彼らは、深い自戒の念に駆られ、人形の埋葬を始める。以上のように、Alcottは、生徒に内在する動物的衝動の極端な例としてインディアン表象を挿入するものの、それがより高度な人間的欲求の芽生える成長過程であることを書き忘れない。

2. Bhaer Garten 内のインディアン教育

では、インディアンらしき生徒 Dan に潜む動物的衝動はどのように描かれているのか。そして、Jo 達は、「優しさは必ず暴力に勝る」という指導方針で彼にも接しているのか。本節では、これらの観点から、Bhaer Garten 内のインディアン教育について考察したい。

Dan という少年は、明確にインディアンとは断定されないものの、価値観やそれに基づく言動において、極めてインディアンに近い人物に設定されている。⁶たとえば、他の生徒が農作業に励む課外活動中、彼は孤独な狩人さながら、単身狩猟採集目的で森へ入る。ここに、白人／インディアン、文明人／「未開人」、農耕／狩猟採集などの二項対立の構図が誇張されていることは言うまでもない。⁷また、勇気や独立心あふれる Dan は、卒園後、放浪生活を送る。さらに彼は、感情を表に出さない孤高のストイシズムの持ち主である (Trites 87)。Dan は、Jo も “Nature is your God” (*Jo's Boys* 109) と認めざるを得ず、聖書を読み始めないことに頭を悩ませているように、異教徒でもある。そして最も注目すべきは、彼が「消えゆくインディアン」さながらの絶滅種として宿命付けられている点である。と言うのも、March 家の子女に対する彼の淡い恋心を見破り、異人種混淆に対する拒否反応を強烈に募らせた Jo によって、Dan は学園を強制追放される。そして移住先の西部で、先述した「運命の村」の首長と同様、彼は西部開拓運動推進派に射殺される。⁸

⁶Dan の人種的アイデンティティについては、批評家の意見が分かれるところである。Beverly Lyon Clark は、彼の人種的アイデンティティの問題を度外視し、Bhaer Garten 内の全生徒が白人であると言及する (341)。さらに、Caroline F. Levander は、Dan の褐色の肌を強調した後、彼が、学園生活を通して馴らされ、「白人性」を獲得すると強調する (42)。しかし、筆者は、作品内に散見する Dan のインディアン表象、及び Dan が生物学的にインディアンであると論究する Roberta Seelinger Trites の論に基づき、彼が白人であるとは考えていない。

⁷文明人の March 家と非文明人の Dan を対比させる構図は、部屋で団欒する Jo 達と、“his [Dan's] lungs seeming to need more than those of civilized people” (*Jo's Boys* 56) と、外の空気を吸うためそこを退室した Dan との対比にも明らかである。

Dan のインディアン性は、外見にも表れている。体内に流れる “Indian blood” (53) もしくは “stain of blood” (183) の影響か、彼の筋骨隆々たる風貌は年を追うごとに野性味を増す。批評家 Fred Erisman によれば、自然児 Dan は、放浪生活時代に送ったインディアン部族との共同生活を通じて最終的には「高貴な野蛮人」のような人物に至るとされている (305-06)。しかし、Bhaer Garten にいた14歳頃、すでに彼はインディアン首長と同一視されていた。まき割り仕事に奮闘するその姿は、“Dan . . . was often seen wrestling with the ungainly knots, hat and jacket off, red face, and wrathful eyes; for he got into royal rages over some of his adversaries, and swore at them under his breath till he had conquered them. . . .” (*Little Men* 243-48) と、先述した大量虐殺を仕掛けるインディアン首長の姿に酷似している。両者は、羽飾りを身にまとうか、裸かという違いこそあれ、文明の象徴と言える洋服を着用せず、顔を赤らめ、斧を振っている。このように、心身両面において Dan にインディアン表象が多用されている事実は、彼の人種的アイデンティティがインディアンと言える所以である。

さて、インディアンの生徒にまつわる学園物語を執筆するに当たり、Alcott が通学式を採用していた Bronson の学校を、小説において寄宿式に切り替えた点は見逃せない。ここで補足しておく、*Little Men* が出版された1870年代とは、インディアン同化教育を行う施設が、通学式から寄宿式へ変化する転換期であった。通学式では難しい24時間管理体制の白人化教育を実現するべく、政府は、食料や衣服の配給や寄付金の付与を条件に、寄宿学校へ子どもを入学させるよう親を説得した (Adams 3)。社会的圧力をかけた結果、19世紀末までには85%近くのインディアン児童が寄宿学校の門をくぐった (13)。寄宿学校のモデル校として1879年に設立された Carlisle Indian Industrial School の教育方針を紹介すると、教師達は、軍隊形式の規律、軍服の着用、入浴、断髪を生徒に課し、インディアン部族語の使用を全面的に禁止した。規律づくめの教育方針に加え、同校は、反抗的な生徒に鞭打ちなど身体的体罰を徹底的に加えたとされる (Trafzer 21)。

親子間の文化継承を根絶やし、子世代のインディアンを完全に文明化するべく、寄宿学校へ生徒を集め、白人社会への従順さを仕込む同時代のインディアン同化教育と比較すれば、Bhaer Garten は Dan に文明化教育をより施しやすく設定されている。Dan は親世代の影響が極めて少ない孤児の上、彼自ら学園に足を運び、

⁸ 白人アメリカ人がインディアンに抱く典型的なステレオタイプについては、Sayre 6 や、アメリカン・ルネッサンス期を代表する作家のインディアン表象を論じた Lucy Maddox の名著 *Removals: Nineteenth-Century American Literature and the Politics of Indian Affairs* を参照のこと。

入園を志願するからだ。そのため、“Well, you can stay a few days, and we will see how we get on together” (L. Alcott, *Little Men* 79) と、主導権は完全に Jo の手の内にある。彼の入園をしぶしぶ許可した彼女は、“If you stay here we shall want you to do as the others do, work and study as well as play” (79) と、自分達の望む理想的生徒となることを彼に促す。そして入園と同時に、Jo は彼に入浴、断髪、服装の交換を課し、彼の「野蛮な」身なりを白人社会にふさわしいものに整える。以上の文明化教育に並行して、同園では宗教教育も行われる。先述したとおり、Jo は Dan が異教徒であると認めながらも、週1度でも聖書を読むように勧め続ける。従って、Bronson の指導方針に則り、鞭打ちを含む身体的体罰こそ行われないものの、Bhaer Garten 内でのインディアン教育は Carlisle 校に代表されるインディアン同化教育と基本的に照応した性格を持っている。

しかしながら、Jo が敷いた文明化教育のルールに Dan を歩かせることは簡単ではない。たとえば、入園を決める試験期間中に、彼は、他の生徒の害となる行動、例えば、ボクシングの手ほどきや、禁止されている酒、タバコ、博打を何度も持ち込む。“I keep a school for boys, not for wild beasts.” (85) と教師から叱られる度に反省する彼は、Bhaer 夫妻の期待に沿う人間になるよう誓いを立てる。そのような人間的要求の目覚めを垣間見せる時もあるものの、Dan の場合、動物的衝動があまりに根深いため、その衝動をはねのけられない。正体不明の衝動“the devil” (245) にとり付かれた Dan は、野を駆けたり、壁によじ登ったり、並木道を宙返りしたりしながら葛藤する。その衝動の強さには、“I *must* run somewhere. . . I like it [Plumfield] though; only the fact is the devil gets into me sometimes, and . . . I feel as if I must burst out somehow. . .” (243-45) と、彼自身も困惑を隠せない。

そこで Jo は、その動物的衝動を解放すべく、彼に授業を抜け出し単独行動を取る自由を与えている。この特別許可は、他の生徒に対する放任主義と一見変わりはないが、実は Jo 側の動機に大きな違いがある。つまり彼女は、Dan の発達を見込むというより、彼の生来の気質“wayward impulses, strong passions, and the lawless nature” (*Jo's Boys* 65) を矯正不可能と断定した結果、授業を放棄する自由を認めたのである。彼の気質が Francis Parkman の言及する激情に駆られた悪魔のイメージと符合している点からすれば、Jo は、Dan がインディアンであるがゆえに、動物的衝動を超克できないと見なしたも同然とも言える。

Dan 以外の生徒ならば抑制できる動物的衝動が、Dan の場合は抑制不可能とされることは、白人/インディアン、もしくは文明人/「野蛮人」という二項対立的な構図を鮮明に際立たせている。

3. インディアン物語を描いた動機

白人の生徒／インディアンの生徒という人種の差異が、両者の発達過程に違いをもたらすとすれば、それは、動物的存在から人間的存在へ成長する Bronson 流教育理論の限界点を語るに落ちるように開陳したことを意味する。インディアンの生徒を重要人物に設定する際、Alcott はその危険性を考慮に入れなかったのか。

この本末転倒な状況は、金銭的成功を目指すあまり、振り返ると “such inflammable nonsense” (*Little Women* 280) や “bad trash” (280) としか思えない駄作を書き連ねた Jo の状況に瓜二つとも言えるが⁹、Alcott がインディアン物語に固執した理由は主に三つある。

一つは、時代の制約である。批評家 Harriet Reisen が “commercial considerations in the racially unsettled period of Reconstruction” (214) と言及しているように、奴隷解放宣言後も根強く残る黒人差別は、白色人種と有色人種が机を並べる学校教育制度の達成を実質上不可能にしていた。そのため、クアドルーンの生徒を登場させるのは時期尚早と Alcott が判断を下した可能性が高い。

二つ目は、政治的なリスクの回避である。クアドルーンの生徒の登場は、作者の *Little Men* 執筆の動機である Bronson の教育思想の再評価以上に、Temple School を廃校に至らしめた主因となった黒人生徒の入学事件の是非を問い直す議論に飛び火しかねない。そのような雑音を消すために、Alcott は、同書を執筆していた1870年当時、アメリカ社会で着々と整備の進むインディアン教育を題材にする方が政治的に賢明と判断したのではないかと推察される。

三つ目は、Alcott の流行意識の高さである。と言うのも、インディアン物語は当時の売れ筋だった。1860年から80年代にかけて、廉価な大衆娯楽読物 *タイム・ノヴェル* が大評判を取るが、その中心主題は James Fenimore Cooper (1789-1851) の皮脚絆物語を大衆化した西部ものであったという (Smith 90-99)。その人気ぶりは、*Little Women* に登場する通俗小説界の第一人者 Mrs. S. L. A. N. G. Northbury の描く、野生動物と乱闘するインディアン表象からも確認できる。インディアンをヒーロー像に昇華させる傾向は、Mark Twain (1835-1910) の *The Adventures of Tom Sawyer* (1868) で、インディアン首長役を取り合う少年全員が首長役を演じた話にも明らかである。⁹

Alcott にとってもインディアン表象は魅力的な素材であったようで、事実、彼女は、*Little Men* と *Jo's Boys* 出版の間に当たる1884年、インディアン捕囚物

⁹ 文学作品以外でも、例えば1880年以降、サーカス界でインディアン首長主催の Wild West Show が脚光を浴びている。

語“Onawandah”を高級児童雑誌 *St. Nicholas* に寄稿している。¹⁰ 続く1885年、彼女がある捕囚体験者に、その体験談をインディアンを主人公に据えた児童向け冒険物語仕立てにして売り出すよう助言した手紙も残されている (Myerson and Shealy 291-92)。¹¹ インディアン物語への注目度の高さに鑑みると、Alcott が意識的且つ戦略的にインディアンの少年を Jo の学園に送り込んだとしても不思議はないだろう。

Alcott はそもそも、インディアン問題への問題意識を少なからず持つ人物であった。事実、彼女は、白人政府の暴政にまみれた対インディアン部族史を告発した作家兼社会改革者 Helen Hunt Jackson (1830-85) の小説 *Ramona* (1884) に感銘を受け、“It recalls the old slavery days, only these victims are red instead of black.” (Cheney 364) と発言したこともある。そして、その問題意識は、Dan の悲恋物語にも反映されている。その悲恋物語とは、March 家の子女 Bess を恋い焦がれる Dan が、異人種混交に心理的抵抗を示した Jo の頑強な反対を受け、学園追放されたものである。その決断に至った Jo は、“The quiet despair in Dan’s voice pierced Mrs. Jo to the heart; but there was no hope and she gave none. . . ; and it was better to go solitary to his grave. . . [She] could not moralize when she thought of his hard life and lonely future” (305) と、内心で教育の限界を痛切に感じている。異人種混交へ心理的抵抗を感じ、Dan と Bess の恋愛が成就する可能性をる彼女は、教育者としても、卒園生の母親としても、彼の恋愛に協力どころか助言さえもできない。胸を突き刺す罪悪感、彼が西部へ出発した後も Jo の中から消えない。なぜなら、西部で彼を待ち構えているものが、墓場を連想させる過酷で孤独な人生であると Jo は予測しており、その引き金を引いたのは紛れもなく彼女自身と自覚しているからだ。彼女の葛藤には、Dan を白人より劣った部族の出と見なしながらも、一歩引いた視点から、March 家の白人優越思想を直感的に批判する複雑な作家のインディアン観が垣間見える。

この他にも、インディアン問題に対する Alcott の批判意識は、Dan の出発日が“one wild March” (312) と、March 家を暗示する言葉が暴力的な言葉で形容さ

¹⁰ “Onawandah” は、“hostile” (442), “dreaded” (442) と形容され、“famished wolf” (442) や “Indian devil” (447) と危険視される「悪い」インディアンと、彼らに拉致された白人少女を白人社会へ連れ戻す「良い」インディアンの対立構図が描かれている。

¹¹ 差出人は、1862年、Dakota 戦争勃発と同時に Souix 族の捕虜となった Jannette E. De Camp Sweet (1833-?) である。彼女は、1894年に捕囚体験記 “Mrs. J. E. De Camp Sweet’s Narrative of Her Captivity in the Sioux Outbreak of 1862” を出版するが、それは児童向けインディアン物語ではない。

れている点からも確認できる。インディアンの側に立って白人批判をする Alcott の立場は、西部移住後の後日談で、白人圧制者に射殺された Dan の手に Bess の金髪が握りしめられていた描写にも続く。いくら彼の表情に “a smile on his face . . . at peace” (316) が浮かぶと言葉が濁されていようとも、その手の描写からは、悲嘆にくれる彼の心境や、Bess との仲を引き裂いた Jo 達への皮肉が込められている。

以上のように、Alcott は、*Little Men* 最終章において、三文小説の英雄のごとく、インディアン部族の救済者として命を全うする Dan の英雄性を強調する。しかし、このドラマチックな結末の裏に、異人種混交に対する白人の強い拒絶反応によって恋愛に終止符を打たれた Dan 側の憤りや無念さを、たとえ感傷小説的な雰囲気は否めないにしても、Alcott は描き忘れない。人間的成長を認められなかった彼の、最期に示した無言の抵抗が、このラストシーンには込められている。

結 論

以上のことを総括すると、Alcott は父の教育観再評価を目指し、Temple School の教育理論を反映した Bhaer Garten 物語を創作した。同園をインディアンの寄宿学校に設定した理由は、インディアン同化政策が本格化した時代背景を考慮し、児童向けインディアン物語の宣伝効果と世間の注目を直感的に察知したことにある。白人の生徒／インディアンの生徒の人種的差異によって、成長過程に変化が表れるという見解は、確かに Bronson の教育理論の限界点を露呈するものであり、当初の目的に逆行していると判断せざるを得ない。しかしインディアンへの差別意識は、インディアンを下の階級の出として扱う同時代の文明化教育のあり方からして、何も Alcott に限った話ではない。それならば、たとえ自虐的であっても、Alcott がインディアン物語を単なる英雄物語に終始させず、白人の異人種混交嫌悪や、当時のインディアン観へ批判的視線を注いでいる点は、非常に先駆的であり、一定の評価がなされるべきであろう。

広島大学

Works Cited

- Adams, David Wallace. "Fundamental Considerations: The Deep Meaning of Native American Schooling, 1880-1900." *Harvard Educational Reviews* 58 (1988): 1-28.
- Alberghene, Janice M. "Attitudes toward African American." Eiselein and Phillips 8-10.

- Alcott, A. Bronson. *Observations on the Principles and Methods of Infant Instruction*. Boston: Carter and Hendee, 1830.
- Alcott, Louisa May. *Jo's Boys and How They Turned Out*. 1886. New York: Little, 1953.
- . *Little Men: Life at Plumfield with Jo's Boys*. 1871. New York: Little, 1994.
- . *Little Women, or, Meg, Jo, Beth, and Amy*. 1868. Ed. Anne K. Phillips and Gregory Eiselein. New York: Norton, 2004.
- . "Onawandah." *St. Nicholas* Apr. 1884: 442-48.
- Calvert, Karin. "Cradle to Crib: The Revolution in Nineteenth-Century Children's Furniture." *A Century of Childhood, 1820-1920*. Ed. Mary Lynn Stevens Heininger, et al. New York: Margaret Woodbury Strong Museum, 1884. 33-64.
- Cheney, Ednah D., ed. *Louisa May Alcott: Her Life, Letters, and Journals*. Amsterdam: Fredonia, 2003.
- Clark, Beverly Lyon. "Domesticating the School Story, Regendering a Genre: Alcott's Little Men." *New Literary History* 26 (1995): 323-42.
- Eiselein, Gregory, and Anne K. Phillips, eds. *The Louisa May Alcott Encyclopedia*. Westport: Greenwood, 2001.
- Elbert, Sarah. *A Hunger for Home: Louisa May Alcott's Place in American Culture*. New Brunswick: Rutgers UP, 1987.
- Erisman, Fred. "Thoreau, Alcott, and the Mythic West." *Western American Literature* 34 (1999): 303-15.
- Levander, Caroline F. "The Science of Sentiment: The Evolution of the Bourgeois Child in Nineteenth-Century American Narrative." *Modern Language Studies* 31 (2000): 27-44.
- Maddox, Lucy. *Removals: Nineteenth-Century American Literature and the Politics of Indian Affairs*. New York: Oxford UP, 1991.
- Myerson, Joel, and Daniel Shealy, eds. *The Selected Letters of Louisa May Alcott*. Athens: U of Georgia P, 1995.
- Parkman, Francis. *The Works of Francis Parkman*. Vol. 2. Boston: Little, 1897.
- Peabody, Elizabeth Palmer. *Record of Mr. Alcott's School, Exemplifying the Principles and Methods of Moral Culture*. 3rd ed. Boston: Roberts Brothers, 1874.
- Reisen, Harriet. *Louisa May Alcott: The Woman Behind Little Women*. New

- York: Henry Holt, 2009.
- Saxton, Martha. *Louisa May Alcott: A Modern Biography*. New York: Noonday, 1977.
- Sayre, Robert F. *Thoreau and the American Indians*. Princeton: Princeton UP, 1977.
- Smith, Henry Nash. *Virgin Land: The American West as Symbol and Myth*. Cambridge: Harvard UP, 1978.
- Stallcup, Jackie E. "Education (Theme)." Eiselein and Phillips 91-93.
- Sweet, J. E. De Camp. "Mrs. J. E. De Camp Sweet's Narrative of Her Captivity in the Sioux Outbreak of 1862." *Minnesota Historical Society Collections*. Vol. 6. St. Paul: Minnesota Historical Society, 1894. 354-80.
- Trafzer, Clifford E., et al. eds. *Boarding School Blues: Revisiting American Indian Educational Experiences*. Lincoln: U of Nebraska P, 2006.
- Trites, Roberta Seelinger. *Twain, Alcott, and the Birth of the Adolescent Reform Novel*. Iowa City: U of Iowa P, 2007.
- 宇佐美寛 『ブロンソン・オルコットの教育思想』, 東京, 風間書房, 1976年。

Indian Education in Louisa May Alcott's *Little Men*: Motives for Depicting an Indian in Children's Literature

Asako Motohka

In the last chapter of *Little Women, or, Meg, Jo, Beth, and Amy* (1868–69), Louisa May Alcott (1832–88) announces that there is a quadroon student in Jo (Josephine) Bhaer's and her husband's school which is called "Bhaer Garten." However, in *Little Men: Life at Plumfield with Jo's Boys and How They Turned Out* (1871), a sequel to the novel, she abruptly changes the nonwhite student from a quadroon to an Indian-like boy, Dan. The second aspect of the novel's queerness is that Alcott reveals that Bhaer Garten is modeled on Temple School run by her father, the so-called educational philosopher Amos Bronson Alcott (1799–1888), but she changes the day school system of his school into a boarding school one in Bhaer Garten. The aim of this paper is to explore her motive and strategy in starting writing an Indian tale.

Judging from Bronson's decision to republish his own school record in 1871, the exact year when his daughter published *Little Men*, it is safe to say that her hit school story is like an advertisement of Bronson's forthcoming book. As a matter of fact, in *Little Men*, Alcott adopts his educational philosophy, that is, to admit children's inner animal impulse and to patiently help to dissipate it by recreation until their human attributes, such as affection, conscience, and intellect, awake. Since Alcott places too much emphasis on representing Indians in her work, she, intentionally or unintentionally, succeeds in revealing the limitations of her father's educational philosophy, rather than enhancing his value as an exceptional educator. For example, all of the white students of Bhaer Garten can conquer their animal impulse; the Indian boy cannot, however, due to the influence of his uncontrollable innate impulse. Through using this kind of traditional racially-biased dichotomy, Alcott stresses Dan's 'savageness.'

One of the reasons why Alcott stops depicting the quadroon is that she avoids reigniting complicated political issues including black education. Temple school, for example, closed just after Bronson permitted a black girl to enter the school. Even in postbellum era, only a very small number of the black people were admitted to school. Consequently, we can easily guess that Alcott judged that an Indian school story would be much less of a problem than a

black school one. By the 1870s, the government had already started to build off-reservation boarding schools to forcibly 'civilize' and Christianize Indian children.

In addition to her political strategy mentioned above, she writes the Indian tale in an attempt to attract much more public attention and achieve a financial success just like that of Mrs. S. L. A. N. G. Northbury, the foremost author of sensational stories in *Little Women*.

Even more important is that Alcott calls Indian problems of the 1870s in question as the story draws to a close. She, for example, criticizes the Marches' forced expulsion of Dan from their school through Jo's heavy feeling of guilt, the phrase "one wild March," and the tragic circumstances of Dan's death in the West. Alcott thus clings to an Indian student with the purpose of expressing her critical views regarding the Indian problem of those days.

Hiroshima University